

COTO TSUSHIN

発行 / 滋賀医科大学同窓会湖医会
〒520-2192 大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
TEL 077-548-2074, FAX 077-548-2094
E-mail:koikai@koikai.org

湖都通信 38号

Since 1987, Editor Takehiro Inui,
Co-editor Takashi Kadowaki,
Tetsunobu Yamane
印刷 / 昌栄印刷 2002.3.15



永田 啓氏(医2期生)、 医療情報部 教授に！

滋賀医科大学眼科講師の永田啓氏は、2月1日付けで附属病院医療情報部の教授に就任されました。卒業生による本学教授就任は二人目。

(抱負は次号掲載)

去る1月26日、第1回「湖医会賞」選考委員会が開かれ、教育領域で埤田氏(3期生)、臨床・福祉領域で井上氏(8期生)が選ばれました。

「湖医会賞」は、滋賀医科大学同窓会「湖医会」創立20周年の記念事業のひとつとして制定されたものです。「研究や学生等の教育、地域医療等の臨床・介護・福祉その他の領域で優れた実践を行い、医学および医療・福祉の向上に貢献した」「湖医会」会員に贈られるもので、自薦・他薦は問いません。

今回は、3名の推薦応募があり、事前に配布された推薦書(推薦資料含む)をもとに、5名の選考委員による活発な議論の末、2名の受賞者が決定しました。受賞式・受賞報告を兼ねた講演は5月に行われる予定です。

また、第2回「湖医会賞」もすでに現在公募中です。詳しくはホームページをご覧ください。http://www.koikai.org (2頁に関連記事)

第1回

『湖医会賞』受賞者決まる！

埤田和史氏と井上慶郎氏に



産婦人科教授
野田 洋一

「副病院長就任にあたって」

特別会員の佐野晴洋元学長が「秋の叙勲」で勲二等瑞宝章を受章されました

湖医会の諸先生方お元気でしょうか。私は昨年10月1日をもって副病院長を拝命いたしました。

この職責は、これまでの病院のシステムではなかったもので、新しく吉川学長の「英断」で設けられたものです。期待されている仕事の内容は何よりもまず医療事故防止に努めるよう申し付けられております。

また、平成16年度から始まる義務化された2年間の卒後臨床実習の実施に関する仕事についても注意深く対処するよう学長からは申し付けられております。このようなことで仕事をさせていただきましますので、よろしくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、医療事故防止、あるいは医事紛争防止等に関しまして多くを学びつつあるところであり、先生方のお役に立てればと祈念いたしております。もし必要があればお気軽にご相談ください。

主な記事

『湖医会賞』	
受賞者決定.....	1 ~ 4
私と音楽.....	5

総会報告.....	6
卓球部OB会.....	7
学生のページ / 海外研修記.....	8 ~ 9
LITTLE WINDOW.....	10

第1回「湖医会賞」を受賞するにあたって

予防医学講座助教授 埜田和史(医3期生)



このたび第1回湖

医会賞をいただくことになり、身に余りすぎる光栄と思っています。私が母校の教官として教育にかかわるよ

うになってまだ12年たらずしかなく、「湖医会賞」に相応しい教育活動ができているとは思えません。今回の受賞は、同窓会が母校の教育活動に並ならぬ関心をもって注目していることの証であり、私にとっては、一層の努力をせよとのご鞭撻であると解釈させていただきます、慎んでお受けいたします。

私は母校を3期生として卒業し、市中病院で一般内科医としての研修を行い、その後、呼吸器を中心とした内科医として勤務した後に、疾患を予防するための医学を学ぶために大学院生となりました。

大学院に入學した80年代の後半は日本社会が「バブル」景気に浮かれ、人権を保障する医療や福祉の社会的な役割を軽視する風潮が広がっていたように思います。学生と一緒に社会医学系の講義を聴いても、出席する学生も少なく無反応に授業が終わっていききました。

ある時、授業の進め方について教授から意見を求められ、「学生の討論による参加型の授業を提案したところ、実際に1コマの授業を担当することになりました。私はある障害者施設の暗黙の入所条件として子宮摘出がなっており、その手術を行っていた大学教授や親や施設の言い分」を取り上げた新聞記事を事前に

配付し、討論型授業に挑みました。結果は、当然ながらうまくいきませんでした。討論にならないだけでなく、大学教授の立場を弁護し新聞記者を攻撃する意見や、「他人の世話になつて生きて行かなければならない障害者は少しぐらい我慢しなければならぬ」という意見が幾つかのグループから出され、反論もなく授業が終了しました。私は最後に、誰の口からも人権という言葉がでなかったことの驚きを感じて述べました。

授業後提出された学生のレポートは、人と異なる意見を言つても喧嘩にならないことがわかった。「自分の意見を他人に言うことがなかった」「障害者と接したことがないので、障害者の人権と言われても実感が湧かない」「知らない間に医者の立場でしか物が考えられなくなっていた」などの感想とともに、新しい形式の授業を高く評価するものとなりました。この授業が私の「医学教育」への入門となりました。

この授業を通じて、学生の社会経験が極めて貧困であること、他人の意見を聴き自分の意見を述べる経験が乏しいこと、人権や倫理について系統的な教育プログラムが無いことを認識することができました。また、何よりも教官側の学生の現状理解が不十分であることを反省することができました。社会医学系の講座ではこうした教訓を踏まえて、翌年より3学年の授業開始にあたり、地域医療施設、高齢者・障害児者福祉施設、精神保健施設、保健行政機関などを訪問し現場での見聞をもとに討論交流会を行い、社会医学の学習動機を形成させるプログラムに取り組むようにしました。また、専任教官が空席となりその存続が議論され

ていた医学概論についても、1992年より社会医学系の講座がコーディネートを担当し、入学早期時より社会経験の機会を広げ、お互いの意見を交し、学生が能動的に参加できる授業形態を試行してきました。特に、夏休みの時期には学生が参加できる体験実習を学内の諸講座や学外の諸機関の協力を得て準備し、3日から4日間学生が実習に参加する「早期体験学習」に取り組みました。現在では、障害児のサマースクール、高齢者福祉施設、障害児・者福祉施設、地域医療機関など20を超える施設や企画が「早期体験学習」の場として提供されています。協力していただいている施設の中には医療機関だけでなく、教護院や児童相談所など従来は医療と直接関係を持たなかった場所も含まれており、学生の視野を広げる機会となっています。

医学部に入學する学生について、学力は入試によって一定水準を保てても、人間性や倫理観など患者が医師に求める基本的素養については教育を通じて涵養する以外に方法がありません。このことは我が国だけでなく世界の医学教育の大きな課題となっています。日々の診療や研究を通じて同窓生が築き上げてきた医学医療に対する社会の信頼を守り発展させることができるよう、今後も学生とともに努力していきたいと思ひます。

最後に私の教育活動が福祉保健医学講座、予防医学講座の教授をはじめとするスタッフの指導の下に、多くの方々の協同作業としておこなっていることを記してお礼申し上げます。

湖医会賞を受賞して

岡山 林道倫精神科神経科病院 副院長 井上慶郎（医8期生）



このたびは、第1回湖医会賞を授与いただき、身に余る光栄と、心よりお礼申し上げます。今はまだ驚きばかりで、心も定まらぬばかりです。

このたびの受賞を思ったび、先輩はじめ諸先生方が日々積み重ねられてきた医療活動を代表して、いただくものと、心を新たにいたしております。思いおこせば、入学と同時に医療問題

研究会に入部し、渡部眞也教授の御指導のもと、様々なフィールドワークを経験し、「地域医療と精神医療を一つとした、より在宅の、患者様の為の医療ができるようになるのではないか」という構想を持つに至りました。

地域医療という領域では、すでに、群馬大学医学部のフィールドワークの成果が示されておりました。地域に退院し生活する精神障害者を、大学の医局の総力をあげてフォローするという試みでしたが、奮闘なされたにもかかわらず、「退院年月の有為差は無かった」という結

論でした。これをみて私を感じましたのは、ことさらに在宅期間を競うことよりも、入退院を繰り返しながらも、何度目かの退院で最終的に末長く在宅で生活することを目指した方が有効であると、実践を通して確信いたしましたところ。そこでチーム医療を手段として用い、患者様を病院の近くのアパートに退院していただき、不安になつたり調子が悪くなつたらいつでも入院してよいのだと説明し、二、三回の休養入院はあったものの、現在は長期間の在宅生活を送つていらつしやる方がたくさんいらつしやいます。むろん、このプロジェクトでは、外来看護婦・精神科ソーシャルワーカー等、コメディカルの協力が不可欠です。が、

林病院も加盟している民主医療機関連合会（民医連）の院所においては、このようなチーム医療を行なう風土が培われていたということが重要なポイントでした。

その後も地域精神医療の観点から、痴呆老人の医療のための「重度痴呆患者デイケア」の創立に関与し、また、痴呆専門病院（3病棟180床）の開設の統括責任者となり、99年10月に岡山ひだまりの里病院』をオープンいたしました。現在は介護保険認定審査員

として活動しております。

労働者のメンタルヘルスが社会問題となつておりますが、精神科の産業医として特に教職員対象の活動をしております。また、思春期メンタルヘルスもまた社会問題となつておりますが、現在、県立高校の学校医として、この問題に取り組んでおります。

最後に付け加えておきたいことは、岡山には、森永ヒ素ミルクの被災者が多くいらつしやいます。この方々の救済対策委員としても十年來携わつております。

なお、当院は厚生労働省指定の臨床研修指定病院となつておりますので、精神保険指定医を目指す研修医の指導にも力を注いでまいりたいと存じます。今後の構想としては、精神科救急病棟の開設・安全管理委員会及び褥瘡対策チームの設置の後、病院機能評価機構の認定を仰ぐ所存であります。

このような、一臨床医としての、一つ一つの小さな仕事を精進してまいりました結果の受賞なのかと思つ次第です。

今後とも、今回の受賞を励みとして、諸先生方、多くの皆様のご指導ご鞭撻をさらにいただきながら、毎日の医療に従事させていたきたいと存じます。

このたびは、まことにありがとうございました。

『湖医会賞』選考委員会の報告

選考に当たって及び選考理由

選考に当たっては委員会にて実に活発な議論がなされ、大まかな選考方針が打ち出されました。選考方針について委員長としてここで述べるべきでありますが、後述の野崎光洋氏の選考理由に譲らせていただきます。以下、基本的な選考方針に基づいた各委員の選考理由を掲載します。

なお、規定により選考委員会は幹事の互選による委員若干名及び特別会員若干名をもって構成され、委員長は選考委員の互選で決定しました。(委員長)

▼野崎光洋

選考委員に選ばれたことを大変光栄に思いつと共に、責任の重さを感じています。特に、今回は最初の選考委員会でもあり、選考の基本方針から慎重に議論が始められました。原案では本賞の対象が、研究、教

選考委員は次の通り(敬称略)

委員長；渡辺一良(会長)
委員；前田敏博・野崎光洋
新井良八
(以上特別会員)
；中島滋美(副会長)

▼前田敏博

候補者3名の中から選ぶ事になった。選考書類を読んで小生がこの学年の順になるので面白くないと言ったところ、多くの先生方から反論され小生も考えを改めた。すなわち、この会の賞に如何なる人をあててをまず討議すべきとなり、討議の結果、在野で頑張っている人が対象となる事になった。

その結果、井上先生・まさに在野で頑張っておられる。この会の賞にぴったりであるとして推薦する事とした。坪田先生・systemに

乗れば当然であるとの意見もでたがsystemに乗っていてもそつでない人もあると言つ事で推薦した。
残念ながら今回選ばれなかった先生については、病理学的研究であるから実験研究として次回以降に評価される可能性もある事になった。

▼新井良八

私は井上慶郎氏を強く推しました。推書によりますと、井上氏は精神科医として、精神病患者の社会復帰、痴呆患者家族の支援、学校精神保健、職場における鬱・過労死の予防、市民公開講座による精神疾患理解の啓蒙に貢献されたということです。今までの医療は、病院にいられた患者さんを対象にした受け身のものであったと思います。井上氏の活動範囲は患者さんに止まらず、その家族や地域、さらには疾患の予防にまで広がり、言わば攻めの医療として高く評価されます。

坪田和史氏は教員として、身体障害を持つ我が学友を物心両面で支援し、その活動は湖医会会員の記憶に永く留めてよいと思います。

もう一人の方は内科医として、農村の医療に貢献しながら、内視鏡による消化器癌の早期発見・早期治療の方法を開発し治療成績を向上させました。その功績は賞賛に値するものですが、臨床・福祉領域の二人目ということで、次点にせざるを得ませんでした。

▼渡辺一良

井上慶郎氏は岡山地方の私立精神病院の勤務医であります。そこで彼は精神科患者の治療にあたりながら、これにとどまることなく、精神疾患に関する啓蒙活動を市民公開講座という形で展開し、さらに患者の社会復帰を目指すため、患者家族への支援をふくめた、新しい精神科医療を目指して成果をあげたという点で高く評価されるべきと考えま

す。

坪田和史氏については湖医会副会長のため、湖医会賞への推薦自体を躊躇するという意見があり、私も、本賞が軌道に乗るまではあまり身内を受賞対象にしたいと考えていました。また、彼はすでに本学予防医学講座の助教授に就任しており、本賞の制定趣旨である、在野の会員の地道な努力にライトを当てる、ということからすると相応しくないのでは、という迷いもありました。しかし議論の結果、その2点を考慮に入れてもなお、彼の教員としての行動は傑出しており、身体に障害を負った後輩が卒業し、医師免許を取得するに多大な貢献があった、との結論に至ったため、表彰することに問題はないとの考えに達しました

▼中島滋美

今回は初めての選考ということで、湖医会賞の趣旨に関して議論された。つまり、研究分野では論文が雑誌に掲載されたり、学会で認められたり、大学のポストを得たりということで評価されるが、一般臨床や福祉、教育などではあまり評価される機会はない。そこで、このようなあまり目立たない分野で頑



張っている湖医会会員に賞を授与することが、本賞の趣旨に最も合致することになった。坪田候補者は、大学の助教授であり、学会でも大学ですべてに評価を受けているはずである。また、湖医会の副会長であることや選考委員からよく知られていることから、本来は本賞の受賞者には選ばれてはいいはずである。しかし、数年前、ラグビーの練習中に頸椎損傷を起こして四肢麻痺になった学生に対し、坪田候補者のサポートは大学の教官として当然なすべき以上のものであった。坪田候補者らの懸命なサポートにより当該学生は無事に学生生活を全うし、国家試験を受験し、さらに医師としての社会生活をスタートすることができた。このことは上記の不選の理由を差し引いても十分に評価されるということとで選考委員の意見が一致し、受賞者に決定した。小山候補者は、無医村での医療をしながら消化器内視鏡分野で活躍されており、十分評価するに値するが、研究面では学会から相当の評価を受けているので、今回は受賞者には選ばれなかった。今回の選考では、坪田候補者以外は直接面識がないために、本当の活躍状況を書類でのみしか知り得ず、候補者の活躍を十分に評価できていない可能性がある。坪田候補者に関しては選考委員すべてがよく活躍状況を知っていたのでまったく異論はなかったが、今後は選考に困る場合も出るのである。次の課題としたい。

会誌湖医会(湖医会創立20周年記念号)に
関連記事掲載

2001年度(第15回)同窓会総会議事録

* 前号第37号に幹事会報告として総会の資料を載せましたが、それを補足して掲載します

1, 役員改選・・・承認 (右記参照)

2, 2000年度事業報告(2000.9.1～2001.8.31)

- ・卒業生祝賀会に西村副会長が出席
 - ・今年度の新入生歓迎委員会への寄付は、要請が無かったため無し
- 以上を追加して承認された

3, 2001年度事業計画(2001.9.1～2002.8.31)

- ・同期会は卒後20年同期会(1期生)と卒後10年同期会(11期生)を行う。20年同期会には、経済的な補助は必要ないのではないかとということで、事務諸経費のみ補助する
 - ・特別な理由による就学困難な準会員を補助する事業については、本人・関係責任者の了解を得て「荻田くんをささえる会」を一般化し、名称も「障害のある学生応援基金」とする
- 以上を追加して承認された

4, 2000年度決算報告は資料通り承認された

5, 2001年度予算は備品予算・湖医会賞予算に変更あり。下記を承認。

＜収入の部＞	＜支出の部＞	
前期繰越	3,312,582	事務費
（振替銀行）	3,020,654	会議費
（郵便局）	291,528	記念品
広告料	600,000	名簿
本年度会費銀行（含、新会員）	2,500,000	名簿
郵便局	3,500,000	通信費
カード控費手数料	100,000	光通信料
湖医会誌広告	2,000,000	通信費
特別会計より(20周年事業費)	3,000,000	寄付
		人件費
		退職者慰労費
		会費雑費
		カード入会補助金
		10年同期会補助金(1期、11期)
		支部組織補助金
		20周年事業費
		病院会費
		同窓会施設立準備金
		名簿雑金
		謝金費（保育園等）
		謝金
		予備費
		次期繰越
	15,012,582	15,012,582

6, その他

(1) 20周年記念事業について・・・《承認》

1) 湖医会賞・・・受賞候補者現在3名

1. 選考委員選出(特別会員含む)

- ・特別会員 野崎先生・前田先生
- ・現役特別会員 新井良八
- ・幹事 渡辺会長・竹下幹事(予定)・林幹事(予定)

2. 総則の変更・・・任期3年→任期最長3年

3. 選考委員会を開催

(2) 湖医会誌 * 昌栄印刷に決定 見積り¥1,425,000→¥1,060,000
(事務局にて可能な限り編集作業をすることにより経費節減)

条件 B5サイズ 150ページ 3800部

* 広告; 製薬会社 30社 ¥1,020,000

開業医 27件 ¥380,000

* 原稿; 原稿依頼を断られた方もあり、入稿は約半分。

特に学年幹事の『各期生便り』の入稿が遅れている。

* 特集・・・『滋賀医大の将来』について座談会が行われることになった

役員一覧 (任期は2001年10月～2003年10月まで)

会 長	渡辺一良(医2期生)
副会長	中島滋美(医2期生)
	永田 啓(医2期生)
	埤田和史(医3期生)
	九嶋亮治(医6期生)
	金子 均(医7期生)
	西村明儒(医7期生)
	本多綾子(看1期生)
兼会計	黒川 清(医6期生)

医学科学年幹事

笹原正清(1)	乾 武広(8)	小森英寛(15)
佐藤 功(1)	内田康和(8)	真田 充(15)
高橋正行(1)	牧浦弥恵子(8)	河端秀明(16)
藤宮峯子(1)	野口俊文(9)	黄瀬一慶(16)
山下真木夫(2)	糸島崇博(10)	吉川浩平(16)
阿部 元(3)	松下亮二(10)	坂口知子(17)
高橋雅士(3)	石川弘伸(11)	四方寛子(17)
若林賢彦(3)	福留寿生(11)	津川拓也(18)
古家大祐(4)	一色啓二(12)	山根哲信(18)
石澤命仁(4)	高瀬年人(12)	北村将司(19)
高田政彦(4)	千野佳秀(12)	塚下しづき(19)
市川正春(5)	福田方子(12)	松井克之(19)
小川 勉(5)	浜中恭代(12)	佐々木文乃(20)
駒井 理(5)	尾関祐二(13)	早藤清行(20)
庭川光行(5)	林 寛子(13)	板東紀子(20)
河崎千尋(6)	前田清澄(13)	三村朋大(20)
竹下和良(6)	池原 譲(14)	伊藤 岳(21)
藤田泰之(6)	門脇 崇(14)	桐ヶ谷大淳(21)
山出一郎(6)	佐々木靖之(14)	望月昭彦(21)
山本育男(7)		

看護学科学年幹事

白石知子(1)	井上直子(4)
高田佳菜(2)	杉山鑑恵(4)
南 明紀(2)	廣峰景子(4)
村松由香里(2)	宮原 梢(4)
亀田諭可(3)	
服部すなを(3)	

詳しくはホームページをご覧ください
<http://www.koikai.org>

議事録 第33回幹事会 兼 2001年度第1回常任幹事会議事録から(2002.1.26)

(1) 会誌「記念号」の進行状況等の説明

(2) 湖医会賞について、選考委員会の報告があり、選考された埤田和史氏・井上慶郎氏を承認し受賞が決定された

(3) 今年度から卒業生祝賀会は同窓会が主催で行うことが決まった

「高岡クリニック開業」昨年10月阪急及び大阪モノレール南茨木駅近くで心療内科、神経科クリニックを開業しました。

高岡秀人

(医11期生)

栃木県立のとちぎリハビリテーションセンターの建設にかかわり早6年。昨年9月にやっとオープンし、その後半年近く実際に患者さん達と外来・病棟で接して、理想と現実のギャップがありました。設計段階での理想としていた部分が多少とも現実となった実感をかみしめています。そして、この4月より、臨床から離れて(今までも事務的業務が多かったのですが)新たに栃木県の行政医師の1人として、まずは障害福祉課所属としての新規業務に就きます。卒後18年間の整形外科とリハビリテーション科の知識を、保健福祉行政に多少とも活かさればと思っています。

大橋俊子

(医4期生)

松井邦泰

(医4期生)

元気で診療をしております。地域医療に最善を尽くすべく頑張っております。



直田幸代

(看1期生)

高年齢初産婦をテーマに研究していますが、あまりにも春の兆しが感じられず、私が被験者になつてしまっています。

私と音楽



名誉教授 脇坂行一

私は、旧制高校の学生であった頃から音楽が好きであった。当時はまだ、手回しのゼンマイ式の蓄音機の時代であったが、諏訪根自子のバイオリンや、ベートーベンの第5交響曲「運命」のシャルク指揮の黒ラベル盤、カザルスのベートーベンのチェロソナタ、勝太郎の島の娘などのSPレコードを聴いて、喜んでた。京都の大学に入って2回生になった時、当時は毎週火曜日と土曜日は、授業が午前中だけしかなかったので、私は、熊野神社の近くの徳田屋という楽器店の2階で行われていたバイオリン教室に入り、T先生について、ホーマンのバイオリン教本1, 2, 3、カイザーのバイオリン教本1, 2などについて、練習した。もっとも、下宿では、同宿の人にとって迷惑になるので、練習は、楽器店だけに限られていた。

バイオリン教室での練習は、3回生になるとともに、授業の方も忙しくなったので、1年間で止めた。その後は、時々自宅で、バッハやモーツァルトの曲などを弾いていたが、平成12年4月から、一念発起して、京都河原町今出川西入りのマツオ楽器店で、田村隆至先生について、基礎から練習をし直すこととなった。

平成13年2月1日、滋賀医科大学平成2年卒業(京都大学医学研究科血液病態学修了、現在静岡市立総合病院内科勤務)の、岩井一也先生から、来る7月8日に草津市の文化芸術会館で、滋賀医科大学管弦楽団の第34回定期公演があり、ベートーベンの序曲「エグモント」、チャイコフスキーの「交響曲第5番」、モーツァルトの「交響曲第35番(ハフナー)」を演奏するので、私に

も是非参加して欲しいとのお誘いを受けた。私も予ねてより、一度黒のスーツに黒の蝶ネクタイを締めて、舞台に上がりたいという夢を抱いていたので、有難くお申し出をお受けすることとした。

間もなく、団員の方が楽譜を私の宅まで、届けて下さった。大部の楽譜を見てその膨大さと急速に上がり下がりする細かい音符を見て驚いたが、乗り出した船で、後へは引けぬと観念して、それぞれの曲のCDを聴きながら、練習を始めた。

合同練習は、6月30日(土)、7月1日(日)、7月7日(土)、7月8日(日)に、滋賀医科大学の学生食堂(但し7月7日(土)の午後と7月8日(日)の午前は、草津市の文化芸術会館)で行われ、土曜日は午後1時から午後5時まで、日曜日は午前10時から午後5時までという猛練習であったが、幸い私は元気で練習を終えることができた。

7月8日(日)の公演は、約400人収容可能の会場が満員で、演奏終了後の拍手が鳴り止まず、多数の花束の贈呈もあって大盛会で、私は嬉しかった。アンコールには、チャイコフスキーの花のワルツを演奏した。終わりに各パートの団員が、指揮者により紹介されたが、最後に指揮者の岩井一也先生が、第1バイオリンの私の席まで、歩いてこられて、私に握手を求められたのには感激した。指揮者の指揮振りは、堂に入ったものであった。終わりに、今回の私の滋賀医科大学管弦楽団への参加について、いろいろとお世話になりました岩井一也先生をはじめ、滋賀医科大学管弦楽団の皆様には厚くお礼を申し上げます。また、当日ご来聴下さいました滋賀医科大学管弦楽団顧問の松田昌之先生、同前顧問の北里宏先生をはじめ、皆様に心からお礼を申し上げます。

“続いています”

滋賀医科大学卓球部OB会



山崎医院 院長
山崎正昭(医2期生)

あれからもう四半世紀が経とうとしています。夏のガラガラした太陽を浴びて、宿舍と体育館を何度もランニングで行き来し、昼休みは疲労困憊で、昼食をすませるや、そそくさと布団に入り寸暇を惜しんで休息を取っていた姿が目にかびます。私と卓球部とのかわりは、西医体にもむけた、淡路島での夏合宿に始まります。

滋賀医科大学卓球部は、1期生の横尾氏、谷村氏らを中心に創設され、顧問には薬理学の戸田先生(滋賀医大名誉教授) 監督は心理学の金光先生(川崎医療福祉大学教授)でした。この恐怖の夏合宿には1期生の藤宮夫妻(山口大学医学部教授、滋賀医科大学助教授)も参加されていて、夜のミーティングではどうしたら効率よく卓球が上達するのか、アカデミックで熱いディスカッションが繰り返されました。この年、西医体に初参加したのですが、「毎年一勝ずつ勝ち数を増やす」をノルマに頑張り、私の卒業時には近畿地区では団体戦ベスト3に入れるようになり、その後、西医体の個人優勝者(11期生浅野君)を出すにいたりしました。

滋賀医大卓球部OB会の発足は1期生卒業後に話しがもちあがり、会長は1期生の横尾氏、顧問は戸田先生でスタートしました。毎年4月の第3もしくは第4土・日を利用して、土曜日にOB会を行い、会食をしながら互いの近況報告をし、日曜日に滋賀医大体育館で、紅白戦や現役対OB戦を行っています。卓球大会の名称は、金光先生にちなんで「金光彩杯」となっていて、あの阪神大震災の時も、11月にはなりましたが開催し、毎年続いています。

OB会会員は、学生の時に卓球部部員であった人や、教職員で構成されていて、現在80名近くに達しています。平成13年のOB会は4月28日、石山の「万里也」で行いました。戸田先生のあとを受けて卓球部顧問をしていただいています基礎生物学の小原助教授や、私たちが教養の時に教えていただいた英語の宮本先生、哲学の大橋先生(京都工繊大教授)や、社会学の中野先生(京都工繊大教授)、現スタッフの数学の寺田教授、物理学の吉田先生にも参加していただき、今回のこの“不思議な会”は大変盛り上がりました(写真)。学生の時に抱いていた印象とは、相当異なる点もありましたが、20年の歳月は、学生と教官の間の隙間をとりはらい、本音で物事が言える状態を作ってくれていました。素晴らしい事だと思いました。私がOB会会長を引き受けて10年が過ぎ、今年、5期生の尾松氏にバトンタッチしました。案内状の発送や、会場の設定、現役生との打ち合わせ等、雑用も多く大変ですが、やはりこの労に報いるものがあつた、続けていてよかったと、この原稿を書きながら感じています。

今回の投稿は金光先生からの提案で、「このような会が20年も続いているのは、他のクラブでもあまりなく一度みんなに報告してはどうか」と言われたことからでした。年一回の集まりではありますが、この集まりで“元気”をもらい、また次の一年元気に過ごす。これが20年続いています。

このようにOB会は元気なのですが、卓球部に關して、ひとつ残念なこと



“不思議な会”は大盛会



がありました。私たちが育ててきた卓球部が、一時休部状態となったのです。現在は、ヨット部と兼部で卓球部は続いています。現役の学生さんにとっては、さらに目立たないクラブになっているようです。卓球をやりたい人もいるかと思われますので、希望の方は小原先生もしくは(5回生の細野君、2回生の十倉君)に連絡いただけたらと思います。

はやいもので、1期生の卒後20年の集まりが平成14年に予定されています。新聞等では国立大学の統合がいわれ、滋賀医大も名前があがっているようです。私たちのOB会は、変わらずこれから10年20年と続いていくことを望みます。

PS :

昨日、滋賀医大近畿同門会の第2回会合が大阪であり、私も初めて出席させていただきました。近畿地区で開業した卒業生の集まりで、何でも気軽に話しあえ、元気と、癒しと、明日へのヒントを与えてくれるすばらしい会でした。この会もずっと続いていくことを願っています。

2001年12月16日 記

海外研修記

発展途上国の医療現場を見て

佐々木亜希子

(医4回生)



私は昨年7月初めから8月末まで、東アフリカのケニアにあるNumbaniという孤児院に海外自主研修生として滞在しました。孤児院附属の臨床検査施設で作業をする傍ら、ボランティアとして子供たちの世話もさせて頂きました。ケニアは、日本から見て地球のほぼ裏側の、赤

道直下の国です。日本からの直行便はなく、乗換えを含めて2・3日かかります。予防注射を何本か打ち、蚊取り線香を山ほど持って出発しました。ナイロビの上空で窓の外を見ると、眼下に広がる草原、アカシアの木、そして空港の敷地内にはキリンが！アフリカに来た！私の興奮は最高潮に達していました。

医療面を含め、あらゆる点で発展途上国であるケニアを海外研修先を選んだのは、医療が充実し、社会水準の高い先進国では起こらないような感染症や様々な疾患が問題となっている現場を実際に見てみたかったからです。ケニアは、アフリカの中では経済的に発展しているほうですが、HIV/AIDSが問題となっており、7人に1人はエイズ感染者であると言われています。平均寿命は50歳で、国内のエイズ孤児も依然増加しています。私の滞在したNumbaniは、エイズ陽性の孤児ばかりを受け入れている施設です。当時76名の子供がいました。すぐ側には臨床検査施設や看護室があり、医者も週に2・3日訪れます。そこでは、エイズ陽性児に対する理想的なケアがされていました。定期的にエイズ関連検査が行われ、必要ならば抗エイズ薬治療もされます。施設内には学校があり、教育が受けられます。食事、衣服、環境に関しては申し分なく、子供たちは何不自由ないように見えました。

ケニアには孤児が多いのですが、このようにエイズ陽性の子供だけを集めることによって、エイズ対策としての健康管理をより行いやすいという利点があります。また、定期的な検査でエイズ陰性になつた孤児は、一般の孤児院に移り、養子にもわれやすくなるという点も重要です。今回ケニアを訪れて、エイズという感染症が猛威を振るう状況での、一つの理想の医療システムを見ることができたと思います。HIV/AIDSを蔓延させる社会的な原因も問題ですが、医学生として、患者である子供たちと一緒に生活し、そこで働く看護婦や検査技師の人達にも色々な話が聞けて、本当に充実した2ヶ月間でした。この海外自主研修の機会を設けてくださったことに感謝しています。特に、今回お世話になつた第2内科の藤山先生、微生物学教室の先生方、準備の際にお世話になつた第1解剖の藤宮先生をはじめとする先生方、支えてくれた友達と、アフリカに行くことを最終的に了解してくれた家族に、感謝の意を表したいと思います。

いつの間にか問題を乗り越えることが楽しみに

谷口智史

(医4回生)

私は昨年の夏、アメリカのノースカロライナ州にあるDuke大学に短期留学してきました。ノースカロライナは緑の多い、どちらかというと日本に近いような州でした。私がお世話になつたのは、Duke大学消化器外科のDr. Mantyhの研究室です。Dr. Mantyh

「人間科学研究報告論集 第1号」発刊

基礎学哲学教授 早島理

豊かな人間性をそなえた医師育成を目指し、社会科学・人文科学系少人数能動学習の一端として、平成13年度から医学科2年生を対象に開講された「人間科学研究」の成果である「報告論集 第1号」が、教育担当副学長馬場教授の支援を得て、この3月に発刊された。この論集は、研究テーマ選択から資料収集・研究発表そして報告論文作製まで、受講生が主体的に取り組み、指導教官は必要に応じてアドバイスをするのみというシステムのなかから生み出されたものである。

滋賀医大附属図書館でも閲覧できるが、関心のある方は、中央研究室(077-548-2131、北野さん)までご連絡下さい(無料)。

には、滋賀医大第1解剖の藤宮助教にご紹介していただきました。また、こちらには、滋賀医大第2外科の木原先生が留学されており、木原先生の行われている研究に参加させていただくという形で海外研修を行いました。ここでは潰瘍性大腸炎に関する研究がなされており、私はその中でも潰瘍性大腸炎における知覚神経の果たす役割、炎症が憎悪されるしくみを、モデルマウスで研究するお手伝いをしました。D.E.る大学はすぐ隣にある退役軍人病院に研究室を一部移しており、私もそちらの研究室に出入りさせていただきました。また、後から聞いて知ったのですが、消化器外科研究チームのチーフであるDr. Pappasはアメリカでも3本の指に入る優秀な外科医であり、Dr. Mantyh自身も彼に負けないくらい有名な外科医だということでした。私の滞在中、藤宮先生がDr. Mantyhを訪ねて来られたのですが、その際に私もDr.

PappasやDr. Mantyhと食事をしたのですが、そのような世界に自分がいることが不思議に思え、いい思い出となりました。私が滞在していたのは7月初めから9月初旬まででした。海外に出るのとが初めてであり、一人暮らしをすることもこれが初めてで、さらに英語を話すことが得意なわけでもないのに2ヶ月もアメリカにいる予定を立てたなんて、今から考えれば結構無謀に見えたかと思えます。しかし、私が今回の短期留学に行つて



よかったと思うことの中で、この積極性を得られたということは大きいでしょう。それまでのような流されるままでも生きていける日常から離れ、異文化に身を置き、今までどおりの考え方でうまくいかないような状況では、とにかく自分から動かないと何も解決できません。初めてのことで、当然行くところ行くところ問題にひっかかりました。そしてそのたび、自分の力で何が出るのかということ、真剣に考えさせられました。最初は空港の入国審査で、ビザが必要だと誤解されて別室で調べられ、乗り継ぎで失敗し、待ちあわせた人とはなかなか会えず、電話のかけ方もままならない。あのときは、アメリカの地を踏まずに日本に帰らなければならなくなるかと思いました。でも、逆に最初でいきなり大きな問題に乗り越えたことが、何とかなるのだという自信になったと思います。その他にも、英語がうまく話せないために、ホテルやレンタカーを借りるときなどにも手間取りましたが、いつのまにか問題を乗り越えていくことが楽しみとなり、何か新しいことはないかと動き回りました。ノースカロライナ州は観光地ではないため観光客は殆どおらず、私のような日本人は珍しいようで、よく行く場所では顔を覚えられて、向こうからも話しかけてくれるようになりました。2ヶ月以上も海外にしかも学生としてという貴重な経験は、今後もう簡単には出来ないでしょう。さらに、Dr. PappasやDr. Mantyhのような素晴らしい先生の下にいられたこともよい経験になりました。このような海外自主研修の機会を授けてくださった吉川学長、馬場副学長、解剖学教室の藤宮助教、木原先生、そしてD.E.る大学の先生方に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。





助教授紹介

種子島章男 (10期生) 滋賀医大法医学講座 助教授



1990年 3月 滋賀医大医学部卒業
 1990年 6月 滋賀医大第2外科研修医
 1992年 4月 滋賀医大大学院医学研究科入学
 (平成6年9月より三重大学医学部大学院特別研究生)
 1996年 4月 三重大学医学部講師
 2002年 1月 滋賀医大法医学講座助教授

本年1月より本学法医学講座に赴任いたしました。前任地である三重大学の6年間を挟んで、学生時代から大学院生時代まで10数年間滋賀で過ごして参りましたので、第二のふるさとに帰って来たような感慨があります。先日、学生時代をともに過ごしてきたテニス部の方々に歓迎会をしていただきました。お会いするのは卒業以来という方々にも大勢来ていただき、感激ひとしおでした。紙面をお借りしてお礼申し上げます。今後も母校の発展のため、ささやかながら尽力したい所存ですので、よろしくお願いいたします。

住所・勤務先肩書き等に変更がありましたら事務局にご一報ください

計 報



北嶋和智教授のご逝去を悼んで

社会保険滋賀病院 耳鼻咽喉科部長

駒田 一朗 (2期生)

耳鼻咽喉科学講座教授の北嶋和智先生が平成13年10月8日、享年59歳で永眠されました。

北嶋先生には研修医の頃に声帯ポリプの麻酔の方法からとり方まで教えていただきました。その後もたくさんの技術や知識を教えてくださいましたが、とつてみるかと初めて鉗子を渡されたときのことが今でも忘れられません。飄々という言葉がぴったりの先生、さすれば火傷をしそうな情熱は奥深くに秘めていつも周囲にやさしさを注ぎをふりまいておられました。日本音声言語医学会、日本喉頭科学会を主催されてさあこれからというときの悲報でした。誰もが早すぎると、しかし先生のお言葉やお人柄は残されたものの心に深く刻まれています。また先生の研究は後進の若い力が受け継ぐでしょう。どうか安らかに眠りください。ご冥福をお祈り申し上げます。

刈側祐一先生を偲ぶ

社会保険滋賀病院 内科部長

中島滋美 (2期生)

平成13年11月18日、生物学助手の刈側祐一先生が急逝されました。刈側先生は、滋賀医大の学生を1期生からずっとご指導してくださり、古い卒業生にとつてはお兄さんのような存在でした。スポーツが好きでよく大学の周りを走っていたら、いつか何かを思い出します。学生実習では、いつも体操服を着て手ぬぐいを腰からぶら下げてられました。夜遅くまで残って実習する学生に対しても嫌な顔をせず、優しく指導してくださり、また最終バスに乗り遅れた学生を駅まで送って下さったりしました。地域では「コ」の会長を連年引き受けられたり、小学校の遊具を作って下さったり、小学生たちにメダカなどの自然観察会の指導をされたり、地域の美化やその他さまざまなボランティア活動をされていました。お会いするといつも笑顔で挨拶をして下さり、とても健康そうに見えました。刈側先生がお亡くなりになられたと聞き、我々卒業生はともびつくりしました。刈側先生のご人徳を偲び、謹んでお悔やみを申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

なお、湖医会に追悼文を投稿されたい方は、同窓会までお送りください。
 アドレスは kokai@kokai.org

追悼抄

富山医科薬科大学 第2病理教授

笹原正清 (1期生)

恩師挾間章忠先生は、病氣療養中のごとき、平成13年12月31日、京都大学附属病院にてお亡くなりになりました。享年69歳。京都大学より、昭和52年に滋賀医大病理学講座初代教授に就任され、大学の発展に御尽力くださいました。平成9年からは副学長として、病氣と闘いながらも、チートリアル教育の導入・確立に、静かな中に強い意志を最後まで貫かれました。本学の医学教育、研究を世界のトップにするという気概は凄まじく、その教えを受けることができた私達同窓生は幸せでした。その熱い心を受け継ぎしっかりと医学の道を歩んで参りたいものです。賜りました御指導に衷心より御礼申し上げます。休む間もなく医学の発展に生を捧げられた先生の御冥福をこころよりお祈り致します。

会誌「湖医会」創立20周年記念号、ただ今作成中！
 ご期待ください。

ご協賛
 ありがとうございます

ノボノルディスクファーマ株式会社 / 中外製薬株式会社
 小野薬品工業株式会社 / 田辺製薬株式会社
 帝人株式会社 / 株式会社近畿予防医学研究所
 扶桑薬品工業株式会社 / エーザイ株式会社

(順不同)